

PHAYAOLレポート 2010-03 (インターンシップレポート)

シャンティ山口のインターシプフィールドワークに参加して

「絆の力で背中を押す」

山口県立大学 国際文化学科 4年 坪谷純希

2008年夏に初めてシャンティ山口のツアーに参加し、今回、念願のチャンスがあり再びタイへ行くことができた。学生参加者が9人と多く、合計12人の活気にあふれた9日間となった。2年前のツアーでは、自身初めての海外ということもあり、驚きや衝撃の連続で、あっという間だったが落ち着いて広い視野で現地を見ることができた。



今回は、今年から始まる新事業「アグロフォレストリーと農村開発」の現場となるホイプム村を訪れた。人口約300人50世帯の山岳地帯に位置するこの小さなモン族の村は、行政から認知されておらず様々なハンデを抱えている。未舗装で雨が降れば通れない山道、急斜面の農地、電気のない家、乾期には水不足で制限される農業。このようにもともとハンデのある村だが、本来は何とか村人の知恵を絞ったやり方で自給自足の生活を営んでいた。が今は換金作物である遺伝子組み換えトウモロコシの栽培が主軸となり、農薬などの購入により赤字に近い状況で貧困に苦しんでいる。何とか利益を出すために違法森林伐採で農地を広げた結果、自然環境にも影響が及んでいる。

ホームステイ先は、ホイプム村に住む夫婦の家に3泊4日させてもらった。そこでもトウモロコシを作っており収入が少ないと言っていた。2人とも普段は明るく幸せそうな夫婦だが、私が「ホンナム（トイレや水浴びをする小屋）はどこですか」と聞いたら、「うちにはないんだ」と微笑んで答えた後、どこか遠い眼をしていたのをはっきりと覚えている。また、自分達の暮らしについて「時代遅れ」と述べ「山での農作業はつらいし都会で働きたいが、お金がないから物価の高い都会には行けない」と語っていた。チャングさん（夫）はモン族の名前とタイ人の名前2つを持っている。モン族の名前では未だに差別があるというのが1つの理由だ。昔は村の中だけで同じように暮らしていたので、多少のハンデは問題でなかった。経済へ組み込まれるとともに外の世界と接し、格差が生まれ「比較」が生じた。

国という規模で見ればマイノリティの山岳民族への差別も生じた。結果として彼らは自分達を「時代遅れ」だと感じている。しかし決してそんなことはない。ナタ1本で何でも作りだすモン族の知恵や急斜面を息も切らさず颯爽と進む姿に、私達がどれほど驚いたことか。客人に対するもてなしの心・思いやりや、村人同士で会うたびに井戸端会議を始める様子に、どれほど心の豊かさを感じたことか。

少し農業のやり方を変えれば、彼らの身体能力や自然と共に生きる知恵をもってすれば、必ず彼らは自分達に対する誇りと自信、そして幸福を取り戻すことができる。

シャンティの活動はあくまで彼ら自身のバイタリティに問いかけ、自立を促す小さな手助けをするものだ。そしてそのシャンティを支えるのが「何かしたい」という心であり、今までに築かれた「絆」なのだと感じた。心をカタチにするシャンティ山口の活動を微力ながらこれからも応援し、できるだけ役に立ちたいと思う。

2010年9月